



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	田口茂著『現象学という思考：〈自明なもの〉の知へ』
Author(s)	鈴木, 俊洋
Citation	哲学, 53, 105-110
Issue Date	2019-01-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75648
Type	departmental bulletin paper
File Information	53_t8.pdf



《書評》

田口茂著 『現象学という思考―〈自明なもの〉の知へ―』

（筑摩書房、二〇一四年）

鈴木 俊洋

本書は、（副題も含めた）タイトルの通り「現象学という思考」がいかなるものかを、「自明なもの」を問うという姿勢を軸として記述した著作であり、現象学になじみのない読者も含めた一般の読者に向けて、現象学を紹介することを目的とする、現象学の入門書である。一般的に難解かつ特殊な術語で知られる現象学を、日常的な具体例をともなった平易な言葉で紹介する本書は、長期にわたりフッサールのテキストを丹念に読み、フッサールの思考の足跡をたどることによって、現象学の世界を自らの足で「歩み」、現象学的に思考することの習得に努めてきた著者ならではの著作であり、現象学の入門書あるいは紹介書として、大きな意義を持つものである。

著者自身も述べているとおり、本書は、すでに数多くある現象学の入門書とは少し異なった特徴を持っている。一見して分かることであるが、本書では、フッサールや他の現象学者たちの著作の概要や用語の解説、あるいは、歴史的経緯や影響関係などに関する記述はほとんどなく、現象学的な専門用語の使用も極力避けて、なるべく日常的な言葉や具体例を使って、現象学という思考様式がいかなるものかが記述されている。著者の言葉を借りれば、本書は、「スタンダードな」入門書ではなく、著者なりの現象学の世界の「歩き方」を記述したものである。

本書の入門書としての大きな意義はそこにある。一言で述べれば、本書は、現象学的思考の世界の紀行文である。現象学の世界に入っている者、あるいは、現象学の世界に入っていないまでも現象学とはどんなものかを知らうとする者が手に取るのが現象学の入門書である。そして、入門書や紹介書のほとんどは、現象学という世界のガイドブックとして書かれる。確かに、そうしたガイドブックは重要である。「事象そのもの」に對峙して思考することを旨とする現象学の世界に入っていくことは、理論上は誰にでも可能であるが、ある程度の道案内がなければ、入口付近で迷ってしまい、ほとんどの場合は、その世界に入っていくことすらできないからである。しかし、よくできたガイドブックは、ガイドブックの通りに観光地を回り、ガイドブックと同じ写真を撮って帰ってくる旅人を生み出すことにもなるし、人によっては、自分の足で世界を歩いている余裕はないのでガイドブックだけを見て、ある程度その世界を知って済ませようという人もいるだろう。そして、特に現象学という世界に関しては、そのような知り方は大きな誤解を生み出すことにつながる場合が多い。実際に、現象学はそのような経緯で生み出された誤解を数多く背負っている。

現象学の世界に入っていくためには何であれ導きの糸は必要であるが、ガイドブックは場合によっては大きな誤解を生み出す元となる。そこで、本書のような紀行文形式の入門書が意義を持つことになる。紀行文であれば、その世界に実際に入っていく者には良い導きとなるし、その世界を自分の足で歩く時間のない者にとっても良い紹介書となるはずである。

著者自身の言葉で述べれば、本書は、現象学という世界について「特定の視角からの、不十分な像しか結ばない」ものであるが、そもそも、「現象学に関していえば、何らかの『全体像』のようなものを描こうとすることは、もっと大きな歪みをもたらすことになる」可能性があり、むしろ「何らかの視角から、現象学的な思考の営みそのものにみずから入り込んでみることに、現象学が描き出す思考の道を実際に歩いてみることの方が、『現象学的思考とは何

か』について、はるかに正確な理解をもたらしてくれる」(p.19-20)のである。

このような動機と特徴点を持つ本書では、先に述べた現象学が背負っている多くの誤解を解こうという意図が随所に見られる。まず、最初に解かれる誤解は、本書の記述法そのものに関係している。

現象学とは、哲学の体系の名前ではなく、一群の思想家の思想の類型につけられた名前でもなく、哲学の方法論の名前である。著者の言葉を借りれば、現象学とは「思考のプラットフォーム」であり、「さまざまな背景をもつ人たちが、相互の違いにもかかわらず、互いに集まって論じ合うことができる広場のような機能を果たしてきた」(p.21)。独特の思考様式のことである。現象学は方法論として捉えられたとき本当に理解される。これは、現象学の特徴を述べるさいによく使われる表現である。現象学的に思考した思考者(例えばフッサール)のテキストの読解はもちろん重要であるが、それは、現象学的に思考したものの足跡をたどって現象学的に思考することの模範を習うという意味で重要なのであって、テキストの解釈自体は現象学的思考ではないし、現象学が目的とする哲学のスタイルでもない。著者の述べる通り、現象学が標榜する哲学スタイルは、「一人の哲学者が真理の預言者のような卓越した位置におり、その託宣を読者たちが歪めずに解釈するというスタイル」ではなく、「その中心にあるのは、・・・あくまで『事象そのもの』、『事柄そのもの』であって、現象学に携わる者が、特権的な媒介者なしに、誰もがその『事象』と直接に対峙」(p.23)するというスタイルである。その思考のスタイルを具体的に実演してみせようとするのが本書に他ならない。

本書では、まず、現象学の最大の特徴が「自明なもの」を問う姿勢とされ、「確かさ」を問うことの難しさ、それがいかに普通でない思考を必要とするかが語られる。その際に、「現象学的還元」という現象学の入り口ともいえる手法が、「自明さを問う」という不自然な態度を自覚するための特別な方策として説明される。「自明なもの」はそのままでは見えてこない。それを見るためには、不自然な思考様式が必要である。そして、「現象学の営みがもつ『不

自然さ』をいつも意識しておくために、『現象学的還元』という特別の方法が必要になる』のであり、それは、「現象学が本来の活動をなすような『道』を確保するため」(ibid.)になされる方策なのである。

こうして、自明さを問う不自然な思考へと誘導することによって、読者を現象学的思考の世界へと導いた後、著者は、「物」、「本質」、「類型」、「自我」、「変様」とフッサールが実際に扱った基本的問題を辿っていく、最後に、「間主観性」と「原自我」という最深部の話題へとつながっていく。

先にも述べた通り、本書の具体的記述からは、現象学の背負っている誤解を解こうという意図が随所に読み取れる。中でも、「構成」、「本質直観」、「超越論的主観性」などといった、現象学の中心的道具で、それにもかかわらず（あるいは、それがゆえに）、多くの誤解を抱える術語についての説明が印象的である。そうした術語の説明においてキーワードとなっているのは、「関係」「相関」「媒介」（あるいは「媒介項」といった言葉であり、これらの言葉は、著者の描く現象学像の底流にある鍵概念である）。

例えば、「物」の章では、「物が物である」という自明さを問うことから始まり、その道の行きつく先で「構成」の意味が説明される。具体的には、「物」の知覚が「射影」に分解され、次に射影の移り変わりと「身体」との相関関係へと説明が移る。最終的に、「構成」は、射影と身体の相関関係の中で、おのずと「物がある」というまとまりをなす構造が生成してくること、と説明される。現象学で言う「構成」は、あらかじめある主観が、射影を集めて、物を作り出すというようなイメージで捉えられてはならないのである。

さらに、「本質」の章では、「本質直観」についても明快な説明がなされる。この術語も、現象学独特の非常に優れた道具であるものの、真正に理解されずに誤解されている場合が多い。例えば、赤という本質は、無限にある、さまざまな赤いものを結びつける統一の結 endpoint（著者の言葉では「媒介項」）のことである。様々な赤いもの（の把握）が集まって赤の本質を作り出すわけではなく、あらかじめ赤の本質（の把握）があって、それが、様々な赤いものたち

を統一しているわけでもない。赤の本質とは具体的な赤いものたち同士の「無際限の結びつきの媒介者となっているような点」のことである。そのような媒介者を伴った把握の仕方のことを現象学では、「本質直観」と呼ぶのであり、それは決して、神秘的なものでも、荒唐無稽なものでも、想像的なものでもない。本書では、このことは、「ハブ空港」のたとえを使ってイメージしやすく説明されている。

また、「類型」の章の末尾では、「絶対的意識」、「純粹意識」、「超越論的主観性」について特徴的で興味深い説明がされている。これらの言葉も現象学特有のものであり、多くの場合誤解されていて、しかも、分かりやすく明快に説明することが難しい言葉である。本書では、「事物があり、世界があり、人間がいる」という、きわめて当たり前のことが、「深い受動性のレベル」ではたらく「類型」によって生み出される出来事であることが語られた後、「この根本的な事実が生成している場」に、さしあたりつけられた名前が「絶対的意識」「純粹意識」「超越論的主観性」である、というように説明される。

こうした著者の現象学的世界の歩き方には、一つの図式が見て取れる。それは、物や人間や世界を「実体」として把握している素朴で自然な思考様式から、「関係」や「媒介」を軸に把握する思考様式へ、という図式である。第七章「間主観性」で論じられる、フッサール他者論の基本概念である「対化」の説明においても、この図式が生かされている。「対化」とは、あらかじめある一つの独立した身体と別の独立した身体が築く関係のようにイメージされがちであるが、そうではない。そこでは「対」という関係が先行して、その関係にある二つの身体は、「対」の不可分の契機に過ぎないのである。

このように著者が実演して見せる現象学という思考様式は、決して哲学者のみの興味の対象ではない。それは、自我や他者や論理や意識や心や脳や認知といった、ことさらに哲学に親近性のあるテーマに限定されることなく、様々なテーマの考察に、まさに「思考のプラットフォーム」として適用できる思考様式である。「現象学運動」という言

葉が示している通り、そもその当初は、それが、現象学が流布したかたちであった。近年、そうした本来の姿に立ち戻るべく、現象学という思考様式は、科学技術の現実的問題について考える場面や、看護の実践の研究といった、哲学の根本問題とは少し離れたところでも活用されるようになってきている。しかし、それでも、まだ、現象学の可能性は尽くされてはいない。最終的には、多くの人が、何かを考える際に、思考様式の一つの選択肢として現象学を考ええるというくらいにまで普及していくことが（実現の可否は別として）理想であろう。

しかし、本書のように、一般に向けて現象学的な思考の要点を伝えるような著作を書くのは非常に難事業である。まず、第一の条件として、現象学的思考の世界を自らの足で歩けるようになっていなければならない。もちろんであるが、それに加えて、自らは歩けるようになった現象学の世界の有様を、人に伝わるように記述できなければならないからである。この第二の条件は、実際には、思われるよりもずっと困難な壁をなしている。本書は、結果的に非常に読みやすく理解しやすく書かかれているが、文章の端々や章立て構成などに著者の多大な工夫や苦心の跡を見取ることができる。この第二の条件の難しさを見ると、軽い体裁とは裏腹に、（あるいは、まさに軽い体裁から見取れるように）、本章は、著者ならではの、著者にしか書けない渾身の力作であり、入門書としても、紹介書としても、「現象学的な思考」の普及のために大きな意義を持つ著作だといえよう。

（文中の引用及びページ数は全て『現象学という思考』（筑摩書房、二〇一四年）からのものである。）（終）